

書評

吉村不二夫 著

医学者のみだ福祉経済学—共生社会への道

大橋 正洋 (神奈川県総合リハビリテーションセンター)

著者は、内分泌学と解剖学を専攻する基礎医学者である。医科大学を退任後、老人福祉に関心を持ち、老人家庭の調査活動などを続けた。その過程で、経済学理論が福祉と深い関係を持つことに気づいた。

老人の在宅介護は、家族の無償サービスによるところが大きいが、核家族化でそれが困難になりつつある。するとヘルパーに重労働を強いることになり、国民の経済的負担も大きくなる。施設介護のほうが、経済的に安く手間も少なくてすむ。しかし現在の老人施設は、個室が少なく設備が貧弱である。中産階級の老人にとって、自分の送ってきた生活の質を反映するような施設はあまりにも少ない。

ところで現在の日本は、アングロサクソン流の自由競争理念が幅をきかせている。しかし日本人に、欧米人のような市民意識があるのだろうか。弱い立場の同胞を助けようとする行動が一般の日本人の心に定着するのだろうか。当面わが国が、競争原理に基づく社会環境を維持するのであれば、老人に限らず、国民の一人一人が、自立しようと意識改革をす

ること、自己責任を自覚することが必要と説いている。

一方、経済学界において、シューマッハーの生命経済学は、地球規模における人間の安定、福祉、環境を守る新しい経済学を求めている。すなわち個人の利益追求を基本とした過当な競争が、国民の福祉発展につながらないという反省が起きていることも紹介されている。

評者は医学生時代の頃、著者である吉村先生に解剖学を教わった。吉村先生は、昨年80歳になられたはずである。本書は、吉村先生と交流がある一流の経済学者達のバックアップを得て書かれている。したがって、欧米の経済学理論と福祉施策の発展史に関する記述は正確で、本質的な部分が要領よく紹介されている。最近では、学校や会社を退任された後に重要な仕事をされる方々が増えている。吉村先生は、今後の高齢社会で個人がとるべき行動を身をもって示されている。

(四六 頁244 2,000円+税 1999 学会出版センター刊)